

**教育講演**

座長： 琉球大学 齋藤 誠一

**フレイル・サルコペニアの病態と  
漢方薬の可能性**

東京大学医学部附属病院 老年病科

小川 純人

高齢者の虚弱（フレイル）は、「高齢期に生理的予備能が低下することでストレスに対する脆弱性が亢進し、生活機能障害、要介護状態、死亡等の転帰に陥りやすい状態」と理解され、加齢に伴う身体・認知機能の低下をはじめ様々な要因によって生じると考えられている。またフレイルは、転倒・骨折リスクや要介護リスクの増大に加えADL/QOLや生命予後にも大きな影響を及ぼすため、高齢者における早期からのフレイル予防、介護予防などのアプローチは重要である。

最近になって、高齢者のフレイルや転倒リスクと大きく関係する要因として、骨格筋を中心に筋量や筋力の低下を特徴とする加齢性筋減少症（サルコペニア）が注目されるようになってきている。また、サルコペニアの診断基準や診断アルゴリズムについてはThe European Working Group on Sarcopenia in Older People（EWGSOP）やAsian Working Group for Sarcopenia（AWGS）などによってまとめられてきている。これまでの知見から、フレイルやサルコペニアの発症・進行には、加齢に伴う栄養障害および性ホルモン・ビタミンD等のホルモンや液性因子の低下など様々な要因が関与している可能性が考えられ、またフレイルとサルコペニアの関連性も次第に明らかになってきている。さらにまた、腎虚に代表される漢方医学的な理論・体系がフレイル・サルコペニアの病態と関連している可能性が示されるなど、漢方薬のフレイル・サルコペニアに対する介入効果や可能性も期待されている。

本講演では、高齢者のフレイル・サルコペニアの病態と漢方薬の可能性について、ホルモン・サイトカインをはじめとする液性因子や栄養状態の加齢性変化、ならびに運動・栄養介入をはじめとした非薬物療法や漢方薬を含めた薬物療法による予防・治療の可能性について紹介する。